

ニューアルバム『ささげもの』によせて

“くじら”の音楽に初めて触れたのは1983年の晩秋でした。私は渡辺音楽出版という会社において、ある日「原宿クロコダイル」へ、自分が担当するアーティストを見に行ったら、いくつかの対バンの一つとして“くじら”が登場したのです。

まず驚いたのが、マイクを使っていないこと。エレキベースだけ、小さなアンプから小さな音で鳴らしていましたが、それ以外は、歌とアコースティックギターとパーカッション、すべて生音。耳を澄まさないで聴こえません。他のバンドは、隣の人と話もしづらいような大きな音ですから（ま、それがふつうなんです）、落差でよけいに小さく感じます。

この人たちは何を考えてるんだろう？ 最初は戸惑いました。が、しばらくすると楽しくなってきました。

まず生ですから音がいい。そもそも「音がいい」ってのは「生音に近い」ってことですからね。これは生そのものなんですからこれ以上いい音はありません。音の小ささには、すぐに慣れるんですね。人間の身体はえらい。慣れるとその小さな音の中にちゃんとダイナミクスも感じられるようになりました。

そして立体的。マイクを使わないから（ベースもワイヤレス）、3人のメンバーは自由に動き回りつつ、歌う（リードとコーラス）。客席に降りてきて、耳のそばでも歌う。あちこちから歌と楽器が聴こえてくるのです。

そして、聴こえてくるメロディに乗った言葉が、妙に気になる。時々心を驚掴みにされる。「踊る男、泣く女」って何なんだ！？ けっして難しい言葉ではないのに、紡ぎ出す世界は日常から1mくらい浮遊しているようです。夢の中では荒唐無稽なことも現実のように感じられる、あの感覚に近いかな？ とにかく、その作品の力にもビックリしました。

私にとっては、目からウロコが落ちるような衝撃的なパフォーマンスでした。

ただ、そのパフォーマンスは、生声の届く範囲、つまり小さな空間でしか成立しません。また、その独特の雰囲気はメディア（CDや配信など）に収録できません。つまり、観客動員数を増やして武道館やアリーナを満杯にし、メディアを売りまくってチャート1位を目指すというような、通常の音楽業界のビジネス目標とは、ハナから袂を分かつようなバンドだったんです。でも、とてつもなく面白い。

1985年に私はEPICソニーに転社しました。請われて入ったわけじゃないですが、“くじら”をぜひやらせてほしいという条件を出し、受け入れられました。今だからバラしちゃいますが、大きく売れるとは思っていませんでした。でも、どうしてもこの音楽を世の中に残したかった。

ほんとはあの衝撃のパフォーマンスを形にできればよいんだけど、それはムリなので、いろいろ考えましたが、1stアルバム『PANORAMA』では、真逆のコンセプトというか、歌以外をすべて“打ち込み”でやってみました。そしてさらにヒネって、1曲、「パンorama」だけはフルオーケストラにして。それがよかったのかどうか、未だに分かりません。

大きく売れるとは思ってなかったけど、レコード会社でお金をもらっている以上、少しでも売れやすいものにはしたかったし、EPICの宣伝スタッフたちも、どうすりゃ売れるんだろうと頭をヒネりながらも、熱心に動いてくれたし、マネージメントも、もちろん本人たちもよく対応してくれたと思います。

だけど結局、「数字」の上では、成功と言えるほどの実績を残すことはできませんでした。5枚のオリジナル・アルバム、3枚のミニ・アルバム、各1枚のリミックス・アルバムとベスト・アルバム、10枚のシングル、さらに別形態(Qujira“Dragon”Orchestra)でアルバムとミニ・アルバムを各1枚ずつリリースして、1993年12月、EPICとの契約は終了しました。

収益面では会社に貢献できなかったかもしれませんが、これだけの作品をつくれたことはよかったと思っています。だって、つくった音楽は無くなりませんから。たとえメディアが廃盤になっても音源そのものは消えません。幸いにも“くじら”の作品は多くが再発売され、世の中に流通しています。流通しているかぎり、また新たにこの音楽と出会い、好きになってくれる人も増えていくでしょう。

EPIC以後も、“くじら”は杉林恭雄さんと楠均くんを中心に、ずっと活動を続けていますが、さすがに音源制作は僅かしかできていません。音源制作にはコストがかかります。80年代に比べれば、遥かに低予算でできるようになったとはいえ、やはりバンドの演奏をいい音でしっかり録音しようと思ったら、個人のお小遣い程度では賅えません。

私は以前から、レコード会社のいちばんの使命は“いい音楽”に投資して、それを世の中に残すことだと、度々発言しています。“いい音楽”かどうかは担当者の主観でいいんです。もちろん会社は儲からないとやっていけない。儲けないとスタッフの給料も

払えないし、音楽への投資もできない。甘いこと言ってるんじゃない、売れる音楽が“いい音楽”なんだ！……というヤジも飛んでくるでしょう(レコード会社には実際真顔でそう語る人がワンサカいました)が、レコード会社ができる社会貢献は、それくらいしかないんです。そして今や社会貢献できない会社はダメでしょ。だから、今レコード会社において、制作を担当している人たち、売ることもだいじですが、まずは、いいと思う音楽を一所懸命つくってください。

そんなところへ、なんと、“くじら”のニュー・オリジナル・アルバムのニュース！  
「galabox」というレーベルがお金を出してくれました。素晴らしい。本当に感謝。

もちろん贅沢はできません。録音2日+ミックスダウン1日の3日間ですべて完了と聞いています。バンドでほとんど一発録りでしょう。でも、百戦錬磨のミュージシャンたちですから、その緊張感をテコにして、実に気合の漲ったいい演奏を繰り広げています。この演奏を音源として残せたことが、とても貴重です。特に、タイトル曲「ささげもの」の矢口博康さんのサックスと近藤達郎さんのピアノにはシビれました。人類にとって、新たな宝物ができました。

多くの方がこのアルバムを聴いてくれますように。そして、残された過去の作品たちも聴いてくれますように。

(EPIC ソニー時代の担当ディレクターだった) ふうおかとも彦